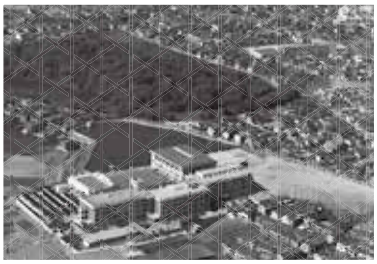
vol.272

# 発見された西大塚村絵図と大塚高校

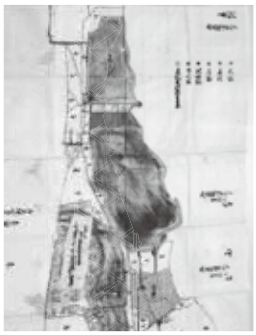
西田 孝司（松原市文化財保護審議会）

▲大塚高校で同校校歌を歌う加藤登紀子さん（昭和59年12月1日,「おおつか5周年」より転載）



▲空から見た昭和62年頃の河内大塚山古墳,今池,大塚高校（「おおつか5周年」より転載,昭和62年）

▲北側の今池（下ノ池）から大塚高校をのぞむ



▲「河劦丹北郡西大塚村麁絵図」（西大塚1丁目・杉中雅洋氏蔵）下が北。

## 江戸時代後半の河内大塚山古墳 下ノ池・上ノ池の土地・用水図

昨秋、西大塚公民館で地元主催の講演会に招かれ、河内大塚山古墳の話しをさせていただきました。その際、杉中雅洋さんから「家に西大塚村の絵図があった」ということで、持参されました。拝見すると年号は入っていませんでしたが、「河劦丹北郡西大塚村麁絵図」とあり、西大塚村の隣村の松原村上田や新堂、立部村の「御殿様」として西大塚村と同じと記しています。西大塚村などは正徳二年（一七一二）にそれまで幕府領でしたが、以後幕末まで関東の大名、つまり殿様であった秋元氏の領地となっていましたので、江戸時代後半の大変貴重なものとわかりました。居村・道筋・池・森などが色分けされています。

特に絵図では、居村の回りの田畑は省略するのに対し、河内大塚山古墳の土地利用をこまかく描いています。それは陵墓ではなく、西大塚村の農民の畑の等級や反別、耕作者を明記したものです。今でこそ、墳丘は木々で覆われていますが、江戸時代は絵図によると、南側の後円部中腹から頂上にかけてのみ森となり、頂上には氏神の大塚社（天満宮）が祀られています。これに対し、後円部下段や北側の前方部は西大塚村の農民たちが開墾した畑でした。しかし、後円部側は下畑や下々畑とあり、耕作にはあまり適さなかったようです。一方、前方部西側は上畑とあり、耕作地として大いに利用されていました。

墳丘は濠で囲まれていますが、北側は北池とよばれ、「西川村・一津屋村・丹下村用水」とあります。市域の一津屋をはじめ、現羽曳野市恵我之荘の西川・丹下地区の灌漑池であったことがわかります。西側の濠も西池とよばれ、同じく「西川村・丹下村・一津屋村用水」と記しています。江戸時代、古墳の下手にあたる三村にとって、古墳の濠も田畑を潤す大切なため池だったのです。

墳丘内では、西大塚村集落から、今のように前方部北西外濠（現宮内庁石碑設置地）から畑に行く道が描かれ、そのまま後円部墳頂まで行く道と、途中で北池近くで農家の建つ東大塚村集落へ延びる二本の道筋が描かれています。数年前、私は宮内庁の許可を得て、墳丘内に入りましたが、江戸時代そのままの村道が今も残っていました。

古墳外の西南側には、二つのため池が描かれています。北が下之池で、今では今池とよばれて池敷面積は三・三〇ha。南は下之池とは田畑を挟んで上之池とよばれ、池敷面積は一・七〇haでした。下之池（今池）の南半分は昭和五十七年ごろから埋め立てられて府立大塚高校となっています。上之池も昭和四十七年に埋められ、大塚運動広場として生まれ変わりました。駐車場側に上ノ池会館があり、町会名を残しています。下之池（今池）と上之池の間は開墾地となっていますが、その地は小字では「中池開キ」とよんでいますので、絵図作成前、上之池と下之池に挟まれて中池があった可能性があります。

両池は絵図からもわかるように、不規則な形をしており、しかも池の南の幅が狭く、北が広い形をしています。これは南から北へ低くなるなだらかな段丘の浅い谷に堤を築いて池を作ったためであると思われます。

ところで、今池を利用した大塚高校は、昭和五十八年に開校しました。校名はいうまでもなく、所在地の西大塚や大塚山古墳から採られたものです。府立高校で初めての体育コースを持ち、今ではバレー部・バスケット部・陸上部などは全国でもトップクラスです。

もっとも、開校当時、校歌がありませんでした。そこで、一期生は大塚高校は自分たちで創っていくのだという気概で校歌を作詞しました。それを聞き、生徒の熱意にうたれた歌手の加藤登紀子さんが補作詞、作曲したのが今の校歌なのです。翌五十九年十二月一日、加藤さんが大塚高校を訪れ、校歌発表会を行ったことは大きな話題になりました。

三番の歌詞に「おもてには環状線 うらには古墳がある 走る未来と古い時代を見つめつづける この大塚の窓から見えた 夢をいだいて この大塚を 超えるほどに 遠くにゆけ われらの大塚 大塚高校 われらの大塚 われらの母校」とあります。青春ソングの曲調で、正門前の中央環状線と大塚山古墳は若人の夢をいつまでも見守っているのです。